

星合正治先生の還暦ご退官を記念して

藤 高 周 平

星合正治先生は大正 11 年 3 月に東京帝国大学を卒業後、直ちに工学部講師になられ、本年 3 月 31 日停年の定めにより退官されるまで、満 37 年一貫して本学に在職された。大正 12 年 4 月に東京帝国大学助教授に任官され、一般電気工学講座を分担、同年 5 月には航空研究所の嘱託となられたが、これは後年航空研究所の電気部となり、先生がその主務者になられるまでの航空電気の発端であった。

昭和 5 年電気学会に岩垂奨学資金による在学研究員の制度が設けられたが、先生はその最初の研究員に選出され、同年 10 月より電子工学研究のため約 1 ケ年北米合衆国に出張、欧州を回遊帰国された。この間、昭和 6 年 8 月に、豊富な内容をもつ“真空避雷器”に関する卓越した研究論文で、工学博士の学位を授与され、同 10 年 10 月には東京帝国大学教授に昇進、電気工学第 4 講座担任となられた。これより先航空部門に電気工学の果すべき役割の重大なことを指摘大いに力説されて、昭和 9 年に井上均氏（終戦時まで在職、助教授）同 10 年に沢井善三郎氏（現在、東京大学生産技術研究所、教授）を航研に迎えて、一意その充実を計られた。今日の航空部門と電気工学の関連を眺めて、当時としてはまことに卓見と申すべきで、その功績は特筆すべきことである。この先生の卓見が実を結んで、昭和 15 年に航空研究所に電気部が作られ、先生は航研所員も併任された。間もなく第 2 次大戦に際し、航研電気部の活動への要請はまことに目覚ましいものがあった。戦後理工研となり、再転して再び新しい航研の発足を見たが、必然の結果として電気部は昔日に倍する規模のものとなった。頭初の生みの親であった先生の感慨もさぞかしと思われる。

昭和 17 年の第二工学部の創設に先立ち、初代学部長になられた瀬藤象二先生を援けてその創設の仕事に多大の努力を尽された。第一工学部と全く同じものを創るという趣旨通り、電気工学科では教官の卒業年次順に、瀬藤先生以下一人おきに第二工学部に移られ、星合先生もその一人として第二工学部勤務となり、電気工学第 4 講座を担任された。教室では工学部長として多忙な瀬藤先生に代ってそのまとめ役であり、本郷の教室の良き伝統を生かすとともに、新しい抱負をもって学生の指導に当たられた。その結果、第二工学部の新しい伝統が培われ、昭和 26 年の工学部改革に至る間に送り出した 8 回にわたる卒業生は、いずれも現在社会の中堅幹部として、大いに活躍している。第二工学部閉学と時を同じくして瀬

藤先生はご退官になり、福田節雄先生は工学部に移られたので、本郷から移られた電気の教官は先生一人となった。生研移行、新教育制度の実施と大きく変転していく教室にあって、先生は始終その指導に当たられた。

生産技術研究所の設立からは、初代所長瀬藤先生を援けて、研究所の基本方針の確立をはじめ、諸制度の制定に大きな力を尽された。本誌「生産研究」は昭和 24 年先生をその初代編集委員長として発刊された。由来文章にも勝れた先生には、発刊当時みづから全原稿に目を通され、諧謔味のある内容梗概を執筆されるなど、縦横の才幹を示された。

先生が昭和 29 年に与望を担って生研所長に就任されて以来、学術行政の面に示された優れた業績は、いまだ人々の記憶に新しいところであろう。発足後 5 年にしてようやく社会の注目を集めつつあった生研に、さらに活動の分野を拡げその向上を期することは、さぞかし大変な仕事であったことと察せられる。“良きにつけ悪しきにつけて問題になる 3 代目”とは当時の先生の感懐で、その 3 代目の所長としてのご心労は、まさに先生の健康をも害わんばかりであった。文字通り万事を犠牲にして、精魂こめて生研の経営にあたられた。在任中に着手された特殊吹精実験設備、観測ロケットの開発などの大きな研究に固い基礎をつくられ、今日の成長を見るまで終始大なる努力をはらわれた。

思うに先生はその長い東大生活中いくつもの大きな時代の変革に遭遇された。卒業が学制改革の時に当たって、先生の在学期間は 2 年半であった。これをはじめとして、航研電気部の創設と終戦によるその解散、第二工学部の設立とその閉学、そして生研への移行、といったように、場合によっては平穩であったかも知れない大学の生活が、先生の場合には波瀾に富んだものであり、几帳面な性格の裏に心労されることも多かったことと思う。しかし先生の卓抜した識見は将来を見通して進路を誤ることなくことに処せられた。一見消滅したかに見えた航研電気部にしても近時旧に倍する規模をもって復活した。生研も開所 10 周年を経て東京移転も行われようとしており、その新しい改革を前にして先生が停年を迎えられたことは、われわれも残念であり、先生の感慨も、またひとしおのものがある。

先生は大学卒業後僅かに十数日にして一般電気工学の講義を担当された。自分らの学生時には測定の講義を担当されていたが、ご性格通り周密な順序だった名講義で、

特に整備されたプリントにはそのご苦心の程敬服の外はない。後年は電子工学の講義を一貫して続けられたが、すべてを通じて大学の講義とはかかるものという手本のような印象的なものであった。先生には電子工学の基礎に関する名著がある。しかし先生は講義に教科書を使われたことはなく、刻々の学問の進歩を取り入れて年々講義内容は変化していった。

先生は大学教授として学生の訓育に並々ならぬ愛情と熱意を注がれた。戦時中先生の研究室が長野県上諏訪と山梨県の甲府在に疎開したことがある。大学院学生や当時学徒動員で配属されていた多くの学生が一緒であった。先生は環境が少しでも良くなるよう努力されたばかりでなく、戦時中多大の困難を押し切ったたびたび激励に回られ、学生と辛苦を分たれたものである。また卒業生の就職の世話を長く続けられたが、当人の性格を十分に勘案されて、いささかも便宜的な斡旋をされるようなことはなかった。最近では第二工学部ならびに分校の卒業生が“母校”を失うことを深く懸念され、折あるごとに工学部の教室と二工出身者の接近を計られた。また、かつて先生が関係された某通信教育事業が不振に陥り、周囲から先生に關係を断つよう奨めた時に、十数万におよぶ通信学生が教育の母体を失うことに深い同情を示されたことも、先生の教育者としての強い責任感と愛情を示すものであろう。

先生は昭和 23 年には工学部新制度実施準備委員として、新学制制度の整備充実に努められた。それにもまして力を尽されたのは、新制大学院に対する研究所の参加の問題であったと思う。研究所の参加が決定してからは、研究所が名実共に学部と同等の立場になることを終始心がけられた。新制度発足後、これが研究所にとっていかばかりか重要な意義をもつものであることを、常々力説されたことであった。

電子工学の将来性をいち早く提唱されたのは先生で、周到なる用意と公正な視野に立ってその学問体系を築かれた。本邦の電子工学の草創の時から今日まで終始一貫その育成に努められた。後年真空管発達の跡を整理し後学の士に里程標となるべき著述を志された。所長時代の劇務に災いされてまだ完成されてはいないが、用意はまことに周密で、すべての文献はいわゆる孫引きを絶対に排し、慣用的な術語すら出典を明らかにされる程であった。こうした該博なる学識と円満な人格のうちに秘めた、時に人生意気に感ずと叫ばれる程の激しい情熱は後進子弟に絶大な感化をおよぼしている。指導に当っては型にあてはめることを嫌い、自由に個性を延ばすことに重点をおかれて、その門からは多数の優秀な人材を輩出せしめ、斯界の興隆に貢献されたところは極めて大であった。常々先走った研究課題に捉われることを厳にいましめ、深い洞察をもって研究開発を行うべきことを説か

れた。有名な“計測立国論”もこうした立場の上に唱導されたもので、すなわちわが国の工業の向かうべき途は優秀な性能を有する計測器の開発にあることを早くから主張された。

本邦電子工業が今日の隆昌を見るに至った蔭には、先生の並々ならぬ努力があり、その功績はまことに不朽と申すべきであらう。

先生の学界活動等については、いまさらあえて多言するまでもないが、昭和 16 年 4 月には全く独創的な手法により 0.1 mm におよぶ極超短波発生法を発見され、電気通信学会より秋山・志田記念賞を受賞された。この時使われた特殊放電管は後に星合管と命名されている。次いで昭和 19 年には電波対地高度計の開発に対する功績により、当時の技術院から院賞を受賞。また電気通信学会長、日本電波協会長、電気学会長、テレビジョン学会長などを歴任されて、それぞれの発展に力を尽された。昭和 24 年 5 月には本邦電気通信工学の発達に寄与した多大の功績に対し、電気通信学会から功績賞を贈られ、また同 28 年 5 月には輝波における誘電体特性測定に関する研究に対し、再び通信学会より秋山・志田賞を受賞された。さらに同 30 年 5 月には本邦電子工学の進歩に寄与した功績によって電気学会から浅野賞を受賞されている。さらに日本放送協会に対しては昭和 14 年放送技術調査会委員を委嘱されてより、同 16 年には技術研究所嘱託となり、終始放送技術の進歩発展に尽された。その功績は昭和 32 年 3 月、日本放送協会から技術関係には珍らしい放送文化賞を受けられたことから、一端を知ることができよう。

研究や指導の面では、至って几帳面であった先生は決して“固い”一方の先生ではなかった。その一つは“お酒”であり、もう一つは先生の“文学趣味”であらう。壮年の頃には酒量においても先導者であった先生は、若い学窓を出たばかりのような人々を引きつれ、諸々方々でその方面の“教育”をされた様子である。しかし先生の“お酒”はまことに静かで、高歌放吟の類は最も嫌われたようである。決して人に強い強いられもせず、静かに酒興を楽しむことを銘じておられた。相手が後進子弟であると会社の幹部であるとを問わず、あるいは苦言を呈し、あるいは技術の趨勢を説き、時には人生万端のことに及んでもっぱら清談を楽しまれた。静かな環境で小人数の集まり、いわば 4 畳半の雰囲気を受された。もっぱら日本酒で、土地々々によって異なる風味を楽まれ、若い連中が洋酒や麦酒に手を出すのを趣味を解せぬ輩と軽蔑されていたようである。時折大学に宛てて到来物が贈られることがあるが、中味は洋酒のことが多い。先生の書棚の隅にはそうした到来物が常々貯蔵されており、大分恩恵に預った向きも多かったようである。卒業生の謝恩会などでは“酒の作法”を講義されることもあ

り、また、科学者らしく呑み方にも独自の理論を持たれていた。酒は量をもって測るべからず、すべからく時間の関数として問題は (dQ/dt) にあるとか、それにも増して有名なのは“一耗主義”“モノモレキュラ・セオリー”すなわち酒はガブ呑みするものではなく、猪口よりはんの1mmずつ静かに風情を楽しむべきものとされ、それによって酒は単分子層的に舌喉をうるおし香味を余すところなく味えるのであると説かれた。一耗主義は時には量をカモフラージュするにもしごく具合よろしいと、思いもかけず、その功德を感謝される向きもあったとかである。近年は量は少なくなられたが時間は反比例して延びてこれ、いよいよ長く楽しむ風格をそなえておられる。

先生の趣味は読書である。娯楽は全くなさらず、映画演劇のたぐいもほとんど観賞されない。数年前、教室での雑談の際先生が戦後いまだに天然色映画を見たことがないことが分り、トーカーをご存知だろうかとお笑いしたことがある。誘われて東おどりを見に行かれた時も、一向に時間を持って余された由である。先生は専門書をよく読まれたばかりでなく、その余暇を挙げて広範囲の読書に費された。専門外のものはもっぱら日本物で、外国ものは戦後一時出回ったミステリ袖珍版を幾つか原語で読まれた程度と聞いている。通勤の電車の中で読破された量も莫大にのぼり、読書は先生の大きい楽しみであり、またレクリエーションであったことは、所長時代自動車を使うことが多くなり本が読めなくなったとこぼされたことから推察できる。まことに博読博識の先生で読書の間口は非常に広く、中でも有名なのは豊臣秀吉に関するもので、あらゆる太閤記をはじめ各種の関連文献を集めておられる。銭形平次全集や川柳末摘花評釈、碧巖録全巻、経書大講全巻と広範であるが、最も愛読されたものは、夏目漱石全集、南方熊楠全集、幸田露伴全集などで、毎月の配本を非常に楽しみにされておられた。こうした素養に培われて、先生は終戦頃から、

俳句、和歌の類をものされるようになり、その方でも大分有名になられた。初めの頃は川柳調のものが多かったが、時を経るにつれて本格派となり、今では句稿も大分厚くなられたようである。本年初頭の句の一つ、“元旦や六段の調べ 日本哉”まことに先生の意気が雅致に富んだ風情に折り込まれた句であろう。先生は独自の風格をもった書をよくされる。方々に折々の感懐を託された色紙の類が残っており、その風格を偲ばせるものがある。

先生はいついかなる所においても常に豁達である。深い学識と豊かな教養に支えられて、言われることは含蓄に富み、聞くものの一々肯綮に当り、肝に徹するものがある。しかもいささかの銜気も蔵されないので、和氣霽々のうちにかんりの苦言を呈することがおできになる人徳をおもちである。まことに大学教授の典型を思わせるご風格の先生が去られることは、痛惜の情忍びがたいものがあるが、幸いにして先生はご健康で、今後もなおいっそう工学と工業のために活動されるものと信じている。

この回想文執筆には近年、公私共最も多く先生の指導を受けた野村助教授を煩わした。(1959.4.6)

星合正治先生ご略歴

大正11年3月	東京帝国大学工学部電気工学科卒業
同 4月	工学部講師嘱託
12年4月	東京帝国大学助教授、一般電気講座分担
同 5月	航空研究所研究業務嘱託
昭和5年10月	北米合衆国に出張
6年8月	工学博士の学位授与
同 12月	欧州諸国を經由帰国
10年10月	東京帝国大学教授、電気第4講座担任
14年12月	東北帝国大学電気通信研究所嘱託
15年3月	航空研究所員を兼任
17年4月	第二工学部勤務、電気第4講座担任
24年5月	生産技術研究所勤務
25年7月	山梨大学工学部非常勤講師に併任
29年1月	生産技術研究所長、東京大学評議員
33年1月	名古屋大学教授に併任
34年3月	停年の定めにより退官

7月号予告

研究解説

斜流ポンプ	井田 富夫
Combined stress の下における コンクリートの破壊性状	坪井 善勝
一鉄筋コンクリート板の曲げ破壊性状について	末永 保美

海外事情

ヨーロッパにおける 自動制御を視察して	大島康次郎
フランスの工業(2)	菊池 真一

研究速報

Pb-Sb 合金の時効に関する研究 —Pb-2% Sb 合金の時効に及ぼす As の影響—	西川 精一
自動曲線追従装置の二次制御	渡辺 勝 渡部 弘之

6月号予告

「生産研究」1959年6月号は、生産技術研究所設立10周年を記念する特集号として編集しております。生産技術研究所の研究活動10年をかえりみて、その研究の歷程と業績とを各研究室ごとに叙述し、過去の総決算的記録を残すとともに、明日へのいしずえとしたいと考えました。内容は、前記研究概要の外に、生産技術研究所長が総括的に「10年の歩み」を記述され、また、前所長4氏からも、それぞれの時代の回想文をいただいております。

本誌は昭和24年10月、第1巻第1号を発行し、現在第11巻に至り、その間休刊はなかったため、次号で通算117号を数えます。この間「生産研究」は生産技術研究所の研究成果を工業界を中心とする外部に知らせるために発行を続けてまいりましたので、次号を「10周年誌」として発行することは、その使命にかんがみて十分意義を感じるところであります。